

コ ル チ 考

——十六世紀イランの近衛兵制度——

羽
田
正

【要約】 サファヴィー朝時代に使用されたトルコ・モンゴル語起源の術語の一つに「コルチ」がある。同時代史料に頻出するにもかかわらず、この語の語義についてはこれまで研究者間で意見が一致していなかった。

本稿の目的は、第一に、十六世紀末に断行されたシャー・アッバースの改革以前のコルチが近衛兵を意味していたことを確認すること、第二に、この時期のコルチ軍が有した諸特徴をできる限り網羅的に検討し、その全体像を浮かび上がらせることである。

それは、サファヴィー朝代になってもなお連続と生き続けるモンゴル時代からの遊牧民的伝統の一端を明らかにすると同時に、シャー・アッバースの改革によって、コルチ軍がどのように変化したのかを検討する為の材料を提供することにもなろう。

史林 六七卷三号 一九八四年五月

は じ め に

トルコ人、そして特にモンゴル人の西アジア侵入以後に著されたペルシア語史料を利用する際しばしば問題となるのが、史料中に現われるトルコ・モンゴル語起源の術語である。イル・ハン国滅亡後百数十年を経て成立するサファヴィー朝国家の時代にもこの種の言葉は、特に官職・称号用語として用いられた。ヤサウル *yasaur*、ブカウル *bukaur*、それにハン *han* などその代表的なものであろう。むしろ官職、称号の大半がトルコ・モンゴル語起源であったと言っても過言ではないほどで、これらの術語の意味するところを正しく理解しなければサファヴィー朝時代イランの政治史、制度史を把握す

ることは不可能である。また、この種の言葉の語義の変遷を辿ることは、イラン・イスラム世界にトルコ・モンゴル系遊牧民が与えた影響を考える際に一つの魅力ある視点を提供することになる。

さて、筆者はかつてこのような術語の一つとしてコルチ *qurçî* という語を取り上げ、この名称で呼ばれる人々の集団がどのような性格を持っていたのかという問題を、期間をサファヴィー朝初代の王イスマーイール一世の時代(一五〇一—二四)に限って部分的に検討したことがあった^①。この集団がシャー(王)の近衛兵的な存在であり、トルコマン各部族から選ばれてシャーに直接仕えたのではないか、というのがその際得られた一応の結論である。その後時代を下り十七世紀中頃までのペルシア語年代記や十八世紀初頭までのヨーロッパ人の記録を系統的に調べてみたところ、サファヴィー朝政治史、軍制史上においてこの集団が果たした役割が当初考えていた以上に極めて大きいことに気付いた。それは、従来確たる史料の裏付けのないまま解説のみが先行していた感のあるいわゆるシャー・アッバースの改革の解釈に直接関わってくる問題で、この改革自体を正しく把える際無視できないものである。

本稿はこのコルチについて、考察期間をサファヴィー朝国家の成立から十六世紀末に行なわれたと思われるシャー・アッバースの改革直前までおよそ九十年とし、二つの問題を解明することを主たる目的とする。一つは、これまで研究者間で意見の一致を見るに至っていないこの語の史料上の語義を決定することである。言葉の意味を確定することは、あらゆる研究に先立つ基礎的作業だからである。もう一つは、この期間のコルチ集団の政治的、経済的、社会的性格を文献史料によって具体的に検討することである。アッバースの改革の結果この集団が如何に変容したのかを探り改革の持つ意義を考える為に、まずこの集団の原型を確かめておくことが必要不可欠だからである。それは同時に十六世紀サファヴィー朝国家の軍制の一端を明らかにすることにもつながろう。

なお本稿で用いる主要ペルシア語史料の略称は次の通りである。

HS: *Çiyâti al-Din Hwândamîr, Habib al-siyar fi ahbâr aḫvâd al-basîr*, ed. Dabir Siyaqi, 4 vols, Teheran 1333.^③

- AI: 著者題名不明のシャー・イスマール史。ms. British Library (以下BLと略記), Or. 3248.
- TT: Šāh Tahmāsp Šakavī, *Tadhkirat-yi Šāh Tahmāsp*, ed. P. Horn, Die Denkwürdigkeiten des Schah Tahmasp von Persien, ZDMG 44 (1890), S. 563-649.
- NGA: Qādi Ahmad Gaffārī Qazvīnī, *Nusakh-i gāhan avā*, ed. Ḥasan Narāqī, *Tārīḥ-i gāhan avā*, Teheran 1342.
- TIN: Ḥūršāh b. Qubād Ḥusaynī, *Tārīḥ-i ilāhī-nizāmīnāh*, ms. BL. Or. 153.
- AT: Ḥasan-i Rūmlū, *Aḥsan al-tawārīḥ*
 ed. 1) C. N. Seddon, *A chronicle of the early Safawis*, Baroda 1931.
 2) 'Abd al-Ḥusayn Navā'i, Teheran 1357.
- HT: Qādi Ahmad Qumī, *Ḥulāṣat al-tawārīḥ*
 ed. 1) H. Müller, *Die Chronik Ḥulāṣat al-Tawārīḥ des Qāzi Ahmad Qumī*, Wiesbaden 1964.→HT₁
 2) E. Glassen, *Die frühen Safawiden nach Qāzi Ahmad Qumī*, Freiburg 1968.→HT₂
 3) I. Isrāqī, *Ḥulāṣat al-tawārīḥ*, tom I, Teheran 1358.→HT₃
- RM: Čalāl al-Dīn Munaḡḡim Yazdī, *Rūzānā-yi Munaḡḡim Yazdī*, ms. BL. Or. 6263.
- AFT: Faḡh b. Zayn al-'Ābidīn al-Ḥūzānī, *Afḡal al-tawārīḥ*
 1) 第一巻 ms. Library of Eton College, Cambridge No. 172.→AFT₁
 2) 第二巻第一一部 ms. BL. Or. 4678.→AFT₂
- TAA: Iskandar Beg Munšī, *Tārīḥ-i ālam āvā-yi 'abbāsi* ed. I. Afšār, Teheran 1334.
- TM: Mirzā Samī'ā, *Tadhīrat al-mulūk* ① ② フラグツミ版, 英訳, 註: V. Minorsky, London 1943.
- ① 「サファヴィー朝の成立」『東洋史研究』三七—二、一九七八年
 一九五—一九九頁。
- ② シャー・アッバースの改革とは、一般に、サファヴィー朝第二代のシャー、タフマस्पの死(一五七六)後の政治的、社会的混乱を收拾

概説書(その最も新しいものは R. M. Savory, *Iran under the Safavids*, Cambridge 1980, pp. 76-103) の典拠は「マフムーン一世死後にイランを訪れたヨーロッパ人の記録の一部」そしてそれをそのまま伝える一九世紀の欧人イラン研究者の論著にすぎず、決して欧文・ムルシア文の諸史料を総合的に検討した上での結論であるとは言えない。

そもそもこのシャー・マフムーンによる改革は「サマフヴァー朝史上そしてイラン史上において極めて重要な意義を有するにもかかわらず、今日までこれに関する論考が殆んどないのが実情である。マフムーンによる簡潔な解説(Minorsky, V, *Tadhkirat al-mirshah*, pp. 16-19, 30-33)が今日まで公开发表された研究のなかで最も良きものであろう。軍制面の改革に関して L. Lockhart, "The Persian army in the Safavid period", *Der Islam* XXXIV, 1959, S. 88-98, K. Babaei, "Voennaya reforma Shaha Abbasa I(1587-1629)", *Vestnik moskovskogo universiteta, Vostochnoe otdeleniye*, 1973-1, pp. 21-29 があるが、前者は誤解や思い込みによる誤りが非常に多い。また後者は「マフムーンの研究とイランのフォルサマニー」による解説(N. Falasafi, *Zandgan'i-yi Shah 'Abbas-i avval*, 5 vols., Teheran, 1956-1963)を総合しただけのもので新味に乏しい。マフムーンによる改革の具体的内容、諸改革相互の関連性、改革の正確な時期、それに後代への影響など考察すべき問題点は数多く残されたまま。

③ 本稿で引用するのはこのうちの第四巻である。

④ リム・リエウによると、この写本は一五六五年、即ち原文完成の二二年後に筆写されたものである(C. Rieu, *Catalogue of the Persian manuscripts in the British Museum*, Vol. I 1895, p. 107)。かくこの写本第三葉及び筆写者は一六二九年完成の *Tarikh-i alam ara-yi 'abbasi* とその著者イスマカントル・ハシダの名を引用して「リム・リエウの説は首肯し難し」。この写本が十七世紀以後のものではないことは確

実である。

⑤ 本稿では特に断らない限り一九七九年のテヘラン版を用いる。なお本史料にはセトンによる英語抄訳がある(C. N. Seddon, *A chronicle of the early Safavids*, Baroda 1934.)

⑥ 三種の出版のうち1はシャー・マフムーン時代一五八七—九二二年の校訂テキストと独訳、2はサマフヴァー家の祖シャイフ・サマフ・*Sa'adya Sa'i* 時代から一五〇一年にシャー・イスマーイールがタブリーズで即位するまでの期間の校訂テキストと独訳、3はイスマーイール一世とタフマース時代の校訂テキストである。従って未校訂のものは残されているのは、タフマースの死からマフムーンが即位する、即ちイスマーイール二世とムハンマド・ホダーンデ時代であるが、この部分については「一五八一年から」H. R. Roemer, *Der Niedergang Irans nach dem Tode Isma'îls des Grossen*, Würzburg 1939 における概略を知ることが出来る。またこの史料の写本の所在並びに著者の用いた資料については E. Echnaqi, "Le Knolâsat al-tawarikh de Qâzi Ahmad connu sous le nom de Mir Moushi," *Studia Iranica* 6-2, 1977, pp. 73-89 参照。

⑦ この史料に關しては G. M. Meredith-Owens, "A short account of the first volume of the Afzâl ul-Tawârikh of Fazlî Isfahânî and its author", *The British Museum Quarterly*, vol. XXV, no. 1-2, 1962, pp. 24-26 参照。但しメレディス・オーウエンズはこの史料の価値をあまりにも低く見ているように筆者には思える。が、この年代記の著者、そして彼が用いたが今日散佚してしまつた原史料に關する解説は有益である。

⑧ この史料にはセイ・ホリーによる英訳がある。Eskandar Beg Monshi, *History of Shah 'Abbas the Great*, tr. by R. M. Savory, 2 vols, Boulder 1978.

⑥ ミノルスキー以来この史料の著者は不明とされていたが、ターネン・エムジューによると、テハランの王立図書館(当時)所蔵の一写本の序に著者名として Mirzā Samīrā の名が記されている。Cf. M.

T. Danispažnīh, "Dastūr al-mulūk-i Mirzā Rafīrā va Taḥkīrat al-mulūk-i Mirzā Samīrā", *Miğālat-e dānīshkade-yi adabiyātī va 'ilmi-yi insāni (Tahran)*, 15 (1346-47), p. 476.

I 語義の確定

(i) 問題の整理

コルチという語の起源はチンギス・カンの時代に溯る。ドルファー Doerfer によれば、弓矢を意味する語 *qoṣṣā* が人を示す接尾辞 *-čā* を伴って *qoṣṣāčā* "弓矢を持つ者" という語が出来、チンギス・カン時代には近衛兵の意で用いられたという^①。

『元朝秘史』によれば、一二〇六年チンギス・カンはクリルタイを開き大カン即位の式を取り行なうが、その際八千の衛士、千ずつの宿衛、^② 飯食の士が各千戸より選ばれ、ここにあわせて一万の内廷勤番の府が出来上ったという。即ちチンギス・カン時代のコルチは近衛兵の一部隊であり、各部族集団から何人かが選ばれてその任にあたっていたのである。

このコルチという語は、フラグの西征と共にイラン・イスラム世界に入り、イル・ハン国で用いられた後、^③ ティムール朝時代にも同じく一種の近衛兵の意味で使用されていた。但し、サファヴィー朝行政、軍事機構の直接のモデルとなった白羊朝国家(アク・コユルル)ではこの名称はなぜか用いられず、*ināq, boy-nokar* なる語が近衛軍を意味している。^④ あらゆる面で白羊朝時代の強い影響をうけて成立したサファヴィー朝国家にあって、少なくともこの語に関しては東方、即ちティムール朝からの影響を認めることが出来るのは興味深い。^⑤

さて、サファヴィー朝時代のコルチという語^⑥ に関してはこれまで二つの対立する見解が提出されている。ここでこの二つの意見を紹介し、問題の所在を明らかにしてみたい。

第一の意見はミノルスキー・V. Minorsky のそれ^⑦、彼が *Tadhkirat al-mulūk* の入門の部分で十七世紀サファヴィー朝

軍隊に関して説明しているうちに含まれる。

もう一つの常備軍は古くからの部族騎兵であるコルチである。彼らは弓、槍、短剣、戦斧、それに防具として盾で武装し、さらさら歩く武器庫である。この勇猛なトルコマン戦士の元來のかぶりものは、シャール・イスマーイールの父がその信者のために定めた赤い帽子であり、それ故に彼らはキシルバシ「赤頭」と呼ばれた。(TM p. 32)

彼によれば、部族騎兵を意味したコルチの語はキシルバシの同義語であった。サファヴィー朝創建に力があったトルコマン部族騎兵即ちキシルバシこそコルチであったということになる。セイボリー R. M. Savory はこのミノルスキーの意見を全面的に継承し、「コルチは、サファヴィー朝権力の基礎を形成するトルコマン部族騎兵であり、キシルバシの同義語である。」と断言している。^⑧

これに対するもう一つの意見はドイツのロールボーン K. M. Röhborn のそれである。彼はミノルスキー、セイボリーらの意見を誤解として斥け次の様に言う。

これら地方長官指揮下の軍隊以外に既に初期サファヴィー朝期には宮廷に騎馬衛兵(*gökbaz*)がいた。彼らは宮廷の従者(*mullazim-i-hassa*)であった。コルチがキシルバシの同義語であるという説はおそらくシャルダンに帰因し、今日の研究にも見受けられる。しかしながらキシルバシがサファヴィー朝初期のすべての騎馬兵軍の呼称であるのに対して、コルチは単に宮廷の騎馬衛兵を意味して用いられた。^⑨

このロールボーン説に従えば、コルチは近衛兵を意味し、一般にトルコマン部族騎兵すべてを指すキシルバシとは同意語ではないことになる。

コルチに関してこのように二つの異なった見解が生まれてきた原因は、察するところそれぞれの研究者が使用した史料の性格の違いによるものようである。ミノルスキーは主にヨーロッパ人の記録を基にサファヴィー朝軍を再構成しているのだが、それらの記録の大部分は十七世紀に入って書かれたものである。とりわけ、彼がコルチの説明に用いたシャル

ダン Chardin の旅行記は十七世紀後半に書かれ、アッパースの改革以後の軍隊の事情を述べたものにすぎない。従ってこれらの記事からだけでは十六世紀の軍隊をも説明したことはならないであろう。

一方、ロールボーンがミノルスキーやセイボリーの見解を批判する根拠として用いたのは、一五三〇年夏、ホラーサーン地方で行なわれたサファヴィー朝全軍による軍事パレードに関する H₁ の記事である^⑩。成程この記事は十六世紀前半のサファヴィー軍の構成を知る為には有効であろうが、これだけでアッパースの改革以後の軍隊のそれを云云するのもこれまた見当違いではなからうか。H₁ の記述とシャルダンの報告との間には百五十年近い歳月が経過しているのである。そもそもミノルスキー、ロールボーンともコルチの語が指示する対象がサファヴィー朝一代を通じて不変であったとした上で自説を展開しているようだが、これは果たして事実であろうか。十六世紀末から十七世紀初め頃断行されたと言われるアッパース一世の改革は、コルチという語、そして集団に何の影響も及ぼさなかったのであろうか。

このように、ここで紹介した二つの相違する見解は、それぞれが異なった時代の史料に依拠し自説を主張しているだけの不十分な議論で、コルチの語義を言い尽くしているとは言えないのである。コルチとは果たしてキジルバシの同義語であったのか、それとも近衛兵集団のことであったのか。ここでもう一度改めて史料に戻ってコルチの語義を考え直してみよう。

(ii) 語義の検討

シャー・タフマスの時代(一五二四―七六)、コルチ集団が主としてトルコマン部族民によって構成されていたサファヴィー朝軍の一部にすぎず、決して軍全体ではなかったということを最も明確に示している史料は、ロールボーンが使用した H₁ である。一五三〇年六月末、タフマスの対ウズベク第二次ホラーサーン遠征の際、ビスターム Bistam 近郊のジャームの野 *Uiang-i-Gam* なる夏营地で閱兵式 (*sen-i-lashan*) が行なわれ、麾下のほぼ全軍が参加した^⑪。H₁ の著者カージー・アフマド *Qadi Ahmad* は、この閱兵式を描写し、タフマスの御前を武装して行進して行く軍隊を部族別に分

類して解説し、それぞれの部族を率いる將軍名、並びに各部族の兵力を簡潔に記している。このパレードの際、各部族軍、更に文官や地方土豪の派遣軍などが行進したあと、コルチバン *qurčibāsi* (コルチ軍長官) が率いる五千人のコルチ部隊が近衛兵として殿軍を勤めているのである。コルチ軍団がキジルバシ (この時代はサファヴィー朝全軍を指す) の一単位にすぎなかったことは明らかであろう。コルチとキジルバシは決して同一の集団を指示しているわけではないのである。

コルチが軍隊の一部にすぎなかったことはヴァーン Van 遠征に出立する際のタフマスブの次の言葉からも分かる。

五四〇〇人の兵のうち一六〇〇がコルチ、残りがアミール達の配下にあった。(TF, p. 604)

さらにイスカンドル・ムンシ Iskandar Munisi はその著書 TAA の中で第四代シャー・ムハンマド (一五七八―一七八七) 時代の出来事として大略次の様な話を伝えている。

キジルバシのアミール達は、反乱を起こしたマーザンダラン Mazandarān の土侯ミールザー・ハン Mirza Han を捕え宮廷へ戻ろうとしていた。この時皇后マフデ・エヴリヤー Mandi-aviya はミールザー・ハン処刑の命を与えて三十人のコルチを出迎える名目でアミール達のもとへ派遣してきた。当時宮廷では皇后が全権を掌握しており、彼女は自分の父がミールザー・ハンに殺されていたため彼に憎しみを抱いていたのである。しかし、アミール達は数ヶ月に亘る悪戦苦闘の末、身の安全は保障するという条件を出してようやくハンを降伏させていた。派遣されてきたコルチの真の意図を悟ったアミール達は、ハンを身柄をコルチ達へ引渡すことを拒否し、次の如く宣言する。

「ハンの身柄は、明日、我々キジルバンが御前へ連行する。」(TAA, p. 242)

コルチとキジルバシが明確に区別して使用されているのである。

一方、十六世紀の欧文史料には残念ながらサファヴィー軍の構成やコルチに関してまとまった情報がない。¹⁹ 筆者が気付いた唯一の興味深い記述は、一五七四年、タフマスブ時代末期にその宮廷に滞在したアレクサンドリ Vincenzino d'Alessandri のものである。彼はコルチバシのことを「王の護衛の長」と言い、「コルチ curzi は彼(王)の個人的護衛として行動し、王国で最も有能で美しい者のうちから選ばれる。」と報告している。²⁰

以上挙げた幾つかの例、それに以前筆者が検討したイスマーイール一世時代のコルチの性格、更にチンギス・カン以来のこの語の語義をあわせ考えると、シャー・アッバースの改革以前のコルチ集団が王の近衛兵であり、サファヴィー朝全軍ではないこと、従ってキジルバシと同義ではないことが諒承されよう。時代をシャー・アッバース治世以前に限って考える限り、前述のロールボーンの見解は全く正しい。^④

コルチとキジルバシを同義語と考えたセイボリーは、イスマーイール一世、タフマズブ時代(一五〇一—七六)、軍の司令官として大アミール *amir al-amara* とコルチバシがあるが、その職能の相違は定かでないとする。^⑤ しかし、上の考察から明らかのように、コルチバシが軍隊の一部であるコルチ軍の長にすぎなかったのに対して、大アミールはキジルバシ全体を統轄し、サファヴィー朝全軍の司令官と言える存在だったのである。

それではこの近衛兵たるコルチ集団は、どのような人々から構成されていたのか、またその職務、政治的役割、社会的地位は如何なるものであったのかなどの問題を以下で順次検討して行くことにする。

- ① G. Doerfer, *Türkische und mongolische Elemente im Neupersischen*, Band. I, 1963, S. 429-432.
- ② 村上正一訳註『モンゴル秘史』3 東京一九七六年、四〇—四一頁、四五頁。
- ③ Doerfer 前掲書 Band. I, S. 430.
- ④ 岡野英二「ティムール朝の社会」『岩波講座世界歴史』8、三〇八頁。
- ⑤ J. E. Woods, *The Aqquyunlu: Clan, Confederation, Empire*, Minneapolis & Chicago, 1976, p. 8, V. Minorsky, "A civil and military review in Fars in 881/1476", *BSOS* 10 (1947), pp. 159-160.
- ⑥ シュメルも同様の考えを持つ。F. Sinner, *Safawi devletinin kurulusu ve gelismesinde Anadolu Türklerinin rolü*, Ankara 1976, pp. 3-4.
- ⑦ この語の語源について「ロールボーンは『モンゴル起源説を採らない。彼はサファヴィー朝期の史料に *qit'iz-yi kamšir* (剣のコルチ) *qit'iz-yi iz u kamšir* (弓矢のコルチ) などの語が現われることから、「ロールチ」に射手という意味をあてることができない。従って語源をモンゴル語のコルチとするのは誤りであるとする。そして *gor-jana* がこの時代武器庫を意味するように、*gor* が武器一般を指示したのではなからこの仮説を提出する。(K. M. Rührborn, "Regierung und Verwaltung Irans unter den Safawiden", *Handbuch der Orientalistik, Erste Abteilung*, VI. Band, 5. Abschnitt, Teil 1, S. 35) しかつ、言葉が時と場合によりその意味を変えて行くことは極めて然り、コルチが射手の意で用いられていないからと言って語源がモンゴル時代まで溯らないとは言えず。以下で述べるように、初期サファヴィー朝

時代には、ロルチとはギンムル時代、ティムール朝時代と同様近衛兵の中心であり、この点では語義は変化してゐる。時間、空間の隔りを考慮するにむしむる元来の意味をよく保存してゐると言へるのならばなからうか。むしむる十六世紀になつてから、別の語根で新しくロルチとて語が作られたと考へる必要はなからう。

② R. M. Savory, "The principal offices of the Safawid state during the reign of Isma'ili I (1501-1524)". *BSOAS* 23 (1960), p. 101. なおセトホリーは、この最近出版された『イスマト百科事典』新版のロルチの項で同様の主張を繰返してゐる。

③ Röhrborn 前掲, "Regierung und Verwaltung", S. 35.

④ K. M. Röhrborn, *Provinzen und Zentralgewalt Persiens in 16 und 17 Jahrhunderten*, Berlin 1966, S. 46-48.

⑤ HTs pp. 198-204. このシャー・タフマスの第二次ホラーサーン遠征の記述は、M. B. Dickson, *Shah Tahmasp and the Uzbeks (The duel for Khurasan with 'Ubayd Khan: 930-946/1524-1540)*, プリンストン大学学位請求論文(未公開)一九五八年、一七六一-一九四頁に詳しい。但し、ディクソンはなぜかこの関係式について全く触れてゐない。タフマスは九三六年シャー・バーン月四日(一五三〇年四月三日)にカズビンを出発し(HTs, p. 195)、同じ年のシャッヴァール月二五日(六月二二日)までに全軍が予め定められていた集結地点ピスタームに到着した(ARTs, fol. 51a)。従つてこの関係式は六月末に行なわれたとみて間違ひない。

II コルチ軍の構成

一五〇〇年、シャー・イスマーイルがシールワーン Shirvan に遠征し、バクター Balkh 城を攻撃した折、この寄せ手の

⑥ を著す書にたゞのちのち T. S. P. Constantinopolitano, *Vita di Isma'el e Thomaz sofí e Re di Persia*, Appendice E di M. Membré, *Relazione di Persia* (1542), Napoli 1969, pp. 165-166 が、軍

軍名に *shah* をくんで *shah* の他は *shah* にも図式的で参考になる。

⑦ V. Alessandri, "Narrative of the most noble Vincenzo Alessandri, ambassador to the king of Persia from the most illustrious Republic of Venice", dans, *Narrative of Italian travels in Persia in the 15th and 16th centuries*, London 1873, pp. 221, 226.

なお、メンブレイの報告の中へ何度もロルチとて語を用ひ、これは騎馬兵 (*omini a cavallo*) を意味するとする。しかし、彼はロルチの長官ロルチ・シの *shah* を個人名だと信じて *shah* と *shah* の語義を正しく理解してゐたかは疑問である。

⑧ 但し、本論でも述べたように、シャー・アハメドの改革以降になつて *shah* の説がその *shah* 無条件で通用するわけでは決してな。改革以後のロルチになつては別に準備中の論考で詳述する予定である。

⑨ Savory 前掲論文一〇二頁。R. M. Savory, "The principal offices of the Safawid state during the reign of Tahmasp I (1524-1576)", *BSOAS* 24 (1961), p. 79. このセイホリー説の根拠は *shah* と *shah* が TM の注で、サマヴァー朝初期、ロルチ・シは通称大アミールと呼ばれ、サマヴァー朝軍総司令官であったと述べていることによる (TM pp. 116-117)。この *shah* と *shah* の説が誤りであることは言うまでもない。

軍勢の中にコルチがいたことが諸年代記に記されている。^①この攻城戦は、同じ年の夏アナトリアのエルジンジャン近郊で以後サファヴィー朝部族連合を形成するトルコマン諸部族が大結集した直後のことであり、コルチ部隊がこのサファヴィー軍結成と時を同じくして既に創設されていたことが知られるのである。但しこの部隊はエルジンジャンで一挙に創設されたものではなく、一四九九年、イスマーイールがギーラーン Gilān 地方で旗上げし、各地で信奉者たちをその旗下に加えながらエルジンジャンに至るまでの道程で徐々に形成されていったものと思われる。それは次に引用する ATJ の一四九九年イスマーイールの拳兵直後の事情を述べた記事によって分かる。

陛下 (Ismaʿīl) の即位以後、トルコマン諸王朝、そしてさらに古い時代にはキジルバシ部族の列やその軍隊に加わらず専ら自らを清める信仰心篤いスーフイーであったムカーナート Muḡānāt、エンオシル Avuḡli (ハ Evgöli)、タリーシニ Tavālis、カラチャ ターグ Qarāčatāḡ、アルシヤク Arsaḡ、アルダゴール Ardabil、ギーラーンのスーフイー達のうち、タリーシニ、アルシヤク、カラチャターグのものはキジルバシ部族の列に加わった。ユズバシ (Yuzbasī) が彼らのために定められ、彼らのうちの何人かがコルチ (qurčiyān-i ʿidām) となった。そしてティニル (Tynū) と適當な俸給 (mauḡzib) が彼らのために割当せられた (ATJ, fol. 60a)。

この文章中、スーフイー達のうちから何人かが選ばれてコルチとなったという点にも注目すべきである。実際、コルチはキジルバシの各部族集団から選出された。イスマーイール一世時代の史料に既に「ヴァルサーク部のコルチ qurčiyān-i varṣāq」^②、「ズルカドル部のコルチ qurčiyān-i du al-qadr」などの言い回しが散見することはかつて述べたが、タフマスプ一世時代になっても事情は全く変わらなかった。いちいち引用しないが、史料は随所で「一部のコルチ」という表現を用いている。この点において、チンギス・カン時代以来の伝統がそのまま継承されているのである。

そして上で紹介した ATJ の記事にもあるように、元来同一の部族に属していたコルチグループの長としてユズバシ職が定められた。「一部のコルチのユズバシ」という言葉がこのことを証明する。^③この職は字義通りには百人長の意であるが、

果たして大体百人程度をその配下に持っていたのか詳細は不明である。いずれにせよ彼らは同一部族集団から選ばれたコルチ達を統率する任務を持っていた。

これらユズバシの上に、コルチ全体の長としてコルチバシがいた。コルチ軍中の有力者がこの職につき、コルチに対するその立場は、

コルチバシがコルチ達の中で、そして國家の柱石(*arkhan-i daulat*)である各アミールがその民と部族(*ti va tynaq*)の中で偉大にして強大となるよう……(後略)。(TAA p. 333)

と並列して述べられているように、トルコマン各部族民に対する部族長のそれと同様のものであった。

このように、コルチ軍はコルチバシを頂点とし、その下に各部族出身のコルチ集団を代表するユズバシ、さらにその下に一般のコルチという三段重ねのピラミッド構造となっていたのである。

シャー・アッバースの改革以前、即ち十六世紀におけるコルチ軍の兵員については三つの数字が伝わっている。その第一は、サファヴィー朝ディヤール・バクル *Diyar Bakr* 総督カラ・ハン・ウスタージャルー *Qara Han Ustajalu* とオスマン軍との一五二六年五月の戦い直後、即ちサファヴィー軍がオスマン帝国によって蒙った再度の敗戦のため半ば壊滅状態となっていた時期に、オスマン帝国のこの方面の辺境総督がイスタンブルへ送ったサファヴィー軍の現状報告の中に見られるものである。

神から見放されたるシャーのコルチ、一千名。チャルディランの戦いの折には三千名であった。その後千七百名となり、現在は一千名である。彼は七百名減員した。^④

第二の数字は上述の一五三〇年の閱兵式の時のもので、カージー・アフマドによれば、当時のコルチバシ、ドーラーク・ベグ *Durak Beg* は五千人のコルチを従えてシャーの御前を行進している。^⑤ タフマスプ時代末期(一五七四)のアレッサンドリもこの同じ五千人という数字を挙げている。^⑥

第三はイスカンダル・ムンシーの記事で、タフマスブ死時(一五七六)、宮廷には四千五百人のコルチがいたという。^⑦

以上よりこの時代のコルチ軍の兵員は、イスマール一世時代初期三千人程度であったものが、チャルディラーンの戦い後一時減少し、その後また増員されてタフマスブ時代を通じておよそ五千人程度であったと結論できよう。

① 例えは AI fol. 62a, HT: p. 202.

② 前掲拙稿二七頁。

③ *yūzbāstī-yi qāwāyān-i qāḡīr* (AFT, fol. 145b) *yūzbāstīgarī-yi qāzī-yān-i ʿigīmi ʿarī* (AFT, fol. 235a).

④ J.-L. Bacqué-Grammont, *Ottomans et Safavides au temps de Sālī Ismāʿīl. Thèse pour le doctorat d'Etat es Lettres et Sciences Humaines présentée à l'Université de Paris I, Paris 1980 pp. 206-207.* ナ+

Ⅲ コルチの職務とその報酬

以前筆者はイスマール一世時代にコルチが近衛兵として果たしていた職務を検討し、主なものとして次の四点を挙げた。(一)戦時、シャーの側でこれを守り戦うこと、(二)シャーの命によりシャーとは別に軍事行動をとること、(三)平常時シャーの宿所、宮殿を警備すること、(四)領内の各地に赴き、シャーの命を伝え実行すること、この四つの基本的職務は、タフマスブの時代になっても全く変わらず、史料にはその実例が数多く見られる。いま、一つの代表的な例としてタフマスブ薨去の折首都カズビン Qazvin の宮殿にいたコルチの言葉を引用してみよう。

シャーは逝き、キシルバン諸部族は二派に分裂している。両グループ共に彼らだけで集まっている。我々は祝福されたる宮殿とハレム、シャーの名譽を守ることを何よりも第一に考え、(中略)何人たりと宮殿への出入を認めなむ。(TAA p. 193)

彼らコルチの忠実さと頑なな態度がこの直後、後継者第一候補のハイダル・シールザー Haydar Mirzā の暗殺とイスマール一世・シールザー Ismāʿīl Mirzā の即位という事態を招くこととなるのだが、それはともかく、この例によりコルチ

ルチャラーンの戦の折の三千という数字は今回使用することの出来なかつた *Qawālīr al-ahbār* によっても確認されるようである。前掲 Reinborn, "Regierung und Verwaltung" S. 36 参照。

⑤ HT, p. 203.

⑥ Alessandri, 前掲拙稿二六頁。

⑦ TAA pp. 141-142.

が宮殿警備の任を忠実に果たしていたことは明らかであろう。

これらの職務内容からも諒解できるように、コルチ集団は、若干の例外を除いて皆通常はシャーの側に仕える常備軍であった^①。ところで、遅くとも十六世紀三十年代の末までには^②、これら宮廷に仕えるコルチ達のうちに、特別の名称を持った少数のエリートが登場してくる。「弓矢のコルチ *qurčiyi tiv u hanan*」「箆のコルチ *qurčiyi tarhas*」「剣のコルチ *qurčiyi sanštr*」「天蓋のコルチ *qurčiyi čatr*」などと史料中で呼ばれている人達がそれである。ロールボンは、「弓矢のコルチ」「剣のコルチ」などという言葉から、コルチ軍の中にこれらの武器で武装した諸部隊があったと考えている^③が、これは少々無理な解釈のように思われる。第一に、これらの称号は必ず一人のコルチの個人名と共に史料中に現われ、管見の限りでは決して集団に与えられていないこと(従って *qurčiyān* という複数形では現われないこと)、第二にロールボンの解釈では「天蓋のコルチ」なる語の説明がつかないからである。筆者は、これら特別な名称を持ったコルチは、シャーの側近で、シャー自身の武器や道具を捧げ持つエリートであったと考える。その根拠は、第一に、殆んど個人名があがらず単に「コルチ達」などと史料中に記される一般のコルチと比べて、上述の名称を持ったコルチは必ず個人名と共に史料に現われること、第二に、「天蓋のコルチ」は、シャーの側で天蓋を支えていたコルチと考えて説明できることにある。これらの名称を持ったコルチ達は、シャー・アップバス即位以後、政治、軍事など各方面で重要な役割を果たすこととなり、このことから彼らがシャーの信頼厚いエリートであったことが証明されるのだが、この点に関して述べることは、本稿の扱う時代を超えることとなるのでここではこれ以上触れない。

さて以上の如き職務を持ったコルチはその勤務に対してどのような報酬をうけていたのであろうか。コルチが受取っていた報酬については史料に制約があり明らかに出来ない部分が多い。しかし一つ言えることは、彼らが俸給 (*muuāgiti*) を受取っていたこと、そしてこの俸給は、他の大部分のトルコマン部族民のそれとは異なり、キジルバシ・ファミリーからではなく、シャー個人の財庫から支払われていたということである。これはコルチの近衛兵的性格を考えると極めて当然で

あろう。

一五七八年、居所のシーラーズから首都カズビンに到着した新シャー、ムハンマド・ホダーバンデは、彼の即位を支持してくれた全ての者に報いるため、宮廷の宝物庫の扉を開いた。この時、少なくとも十年來全く俸給を受取っていなかったコルチたちは、一挙にこの全期間の俸給の合計に価する額を手にしたと言う。また、一五三九年から四十年にかけてタフマスプの宮廷に滞在したメンブレも、シャーが、多いもので年間三十トマン、少ないもので四―五トマンの俸給 (*soldo*) をコルチに支払っていたと伝えている。^⑤ 実際、シャーの行財政機構の役職中には、「コルチのワジール」「コルチのムスタッフィー」^⑥ というコルチ関係の財政を専門に取扱う特別職も存在していたのである。

しかし、同時に、上述のシャー・ムハンマドの論功行賞の例は、コルチが家族に加えて何人かの従者をも養いながら十一年以上に亘って俸給を全く手に行うことなく何とか生活して行くことが出来たことを示している。先に、サファヴィー朝国家の創設期イスマール一世時代初期にスーフィー達がサファヴィー軍に加入し、新しくコルチが任命されたとするATIの記事を紹介したが、そこには、コルチ達に俸給とティユルが割当てられたとあった(十一頁)。ティユルの詳細についてはまだ問題が残されているが、いずれにせよ、これが臣下への土地割当てであったことは確実である。俸給以外にこの割当てられた土地からの収入もコルチの経済的基盤として重要であったことは間違いない。即ち、コルチの報酬は俸給とティユルの二本立てだったのである。

① 一団のコルチがメシエドの聖廟を守護していた(TAA p. 203)。また、ロールボーンも指摘しているように、若干数のコルチは、タフマスプ時代に地方に駐屯して来たようである。 *qutayyan-i Yihdn, qutayyan-i Nuhjivan* (HTs, pp. 355, 356) などの語がそれを裏付ける。

② *Membre* 前掲書三九頁に見え *coching corsichil* (Aq jay gortisi) の語が管見の限り最も早い。なおここでもメンブレがトルコ語形を記録していることは、タフマスプ治下のメルシア宮廷でのトルコ語使用を

裏付ける証拠の一つとして興味深い。常にメルシア語形(この例について言えば *qutay-yi hir u kumun*)しか現われな、メルシア語年代記史料とは対照的に、欧人の記録には十七世紀になってもこれらの職名はトルコ語形で記された。 Cf. R. du Mans, *Etat de la Perse en 1660*, Paris 1890, p. 24. P. Bedir, *Cehit-Sirun* Wien 1678, pp. 245, 246. 文章語としてのメルシア語、話し言葉としてのトルコ語とこの時代のイラン・イスラム世界における両言語の特性がよく表わされて

この例である。

- ③ 前掲 Röhborn, "Regierung und Verwaltung", S. 35 note 126.
- ④ TAA, p. 228.
- ⑤ Membré 前掲書, 四十頁。

IV コルチの政治的役割と社会的地位

この時期のコルチ集団が果たした政治的役割を知るには、この集団の長、コルチバシンの動向を調査してみるのが最も適當である。そこで、以下でまず史料に現われるコルチバシンをまとめて表にし、彼らについて知りうることを註のかたちで整理してみることにする。

〔表〕 アッバース一世即位以前のコルチバシン

年 代	コルチバシン名	典 拠
1	Abdal Beg Dada (Yakān Beg Takkalū)	AT p. 118
2	九一五〇—九一五〇九一〇 Sārū Pira Ustāgālū	AT pp. 190, 195
3	九二〇〇—九二〇一五 Bakt Beg Ustāgālū	TIN fol. 39b
4	九三五〇—九三五二八—二九 Tatār-ūglū Takkalū	TIN fol. 39b
5	九三六〇—九三六二九—三〇 Dūrāq Beg Takkalū	HT ₃ p. 204
6	九三七〇—九三七二一 Dūra Beg	AT (Seddōn) p. 236
7	九三七〇—九三七二一 Dada Beg	AT p. 310
8	九四〇〇—九四〇三三—三四 Parvāna [*] Beg Takkalū Ĥalifa Muḥammad Šāmlū Uglān Ĥalifa Šāmlū	TT p. 586 TT fol. 46a TT p. 595
9	九四〇〇—九四〇三三—三四 Šir Ḥasan (Dū al-qadr)	TT p. 608

- ⑥ これらの職がはじめて史料に現われるのは、管見では「コルチのワジーン」が九三九七（一五三三—三三）年（HT₃ p. 225）、「コルチのムスタフイー」が九四〇九（一五四三—四三）年（AT₃ fol. 114b）である。
- ⑦ TAA, p. 142.

15	九八五／一五七七	Quli Beg Afšār	TAA pp. 223
14	?	Allāh-quli Beg Afšār	TAA p. 213
13	?	Yūsuf-quli Sulṭān Afšār	TAA p. 140
12	九八二／一五七四	Aḡmad Beg Afšār	HT ₃ p. 587
11	九六九／一五六二	Savunduk Beg 死	NGA p. 236 HT ₃ p. 435
10	九四〇／一五三一三四	Savunduk Beg Afšār	HT ₃ p. 236

〔表註〕

- 1 シャー・イスマーイール即位以前から彼に隨き従う「ラーヒシャーンのスーフイー」の一人。イスマーイールの父、スルタン・インダル Sulṭān Ḥaydar の血の復讐の爲タムルサラーン Tabarsarān へ派遣された時コルチンシと呼ばれてゐる。(拙稿「サファヴィー朝の成立」四二―四三頁参照。)これが唯一彼がコルチンシとして紹介をされている例で、就位年、退位年とも不明。
- 2 キイボリーは「この年の人物がコルチンシであった」として紹介されている(R. M. Savory, "The principal offices of the Safawid state during the reign of Ismaʿīl I (1501-1524)", *BSOAS* 23, 1960, p. 101)。しかし彼がその根拠として挙げている *Sarraf Nama* の該当頁にそのような記事はなく、管見の限りではこの人物の名がコルチンシの称号を伴って史料に現われることはなからず。従って本表ではかっこを付す。
- 3 この人物はチャルディランの戦いで戦死するが、この時コルチンシと呼ばれている。彼がいつコルチンシとなったかは全く不明である。

4 この人物がコルチンシであった時期も不明である。彼の名は「オスマン帝国のタルコ語文書の中に現われるだけでも」。 Cf. J.-L. Bacqué-Grammont, "Une liste d'émirs ostāgia révoltés en 1526", *Studia Iranica* 5-1, 1976, pp. 96-97, 100, id. *Ottomans et Safawides au temps de Šāh Ismaʿīl*, Paris 1980 p. 449, note 646. 筆者は「この人物がタムルメン時代に *amir-i diwān* となるハドル・イヴ・ウスタージャー Badr Beg Ustāğāli と同一人物ではなからずかと考えてゐる。実際「シュメル」は「典拠を明らかにしてはならないが、このハドル・ヘンタにコルチンシの称号を付してゐる。F. Sümer, *Sefevî devletinin kuruluş ve gelişmesinde Anadolu Türklelerinin rolü*, Ankara 1976 p. 58 参照。

- 5 この人物は、当時のワキール、チューハ・スルタン・タッカルー Cüha Sultan Takkañ と衝突し、シャーム Gam の戦いの前に殺される。
- 6 既に述べたように、この人物がこの年ホラーサーンでの閩兵式の時コルチ軍を率いている。
- 7 史料によって幾つかの綴字があるが、この三つの名が6のドーラク・ベグと同一の人物を指すことは明らかである。この人物は一五三一年のタッカルー部とシャームル部の内戦の折、混乱の中で殺される。
- 8 一五三一年にタッカルー部が弾圧された後オスマン側へ寝返ったウラーマ・タッカルー Diana Takkañ の動きを探るためにシャールにより派遣されるのがこのコルチバンである。
- 9 ITには部族名が記されていない。部族名はシュメル前掲書九五頁による。
- 10 この人物がコルチバシの称号を伴って史料に引用されるのは、この年彼がアルカース・ミールザー Algas Mirza (タフマスブの弟)と共に当時のワキール、フサイン・ハン・シャームル Husayn Han Şamlu を処刑する時が初めてである。以後各地への遠征軍の参加人物リストの中にしばしばこの人物の名を見出すことが出来る。
- 11 HTによればセヴンドーク・ベグ Savundur Beg の死は九七〇年ラビー二月一日(一五六二年十二月二七日)、NGAはこれを九六九年同月同日(一五六二年一月七日)のこととする。どの史料にも彼の後継者の名は記されていない。
- 12 HTはこの人物がこの年コルチバシのポストを離れたとすることが、AFT¹巻末の高官リストでは、タフマスブの死去時(一五七六)相変わらずこのアフマド・ベグがコルチバシであったことになっている (fol. 275b)。いずれが正しいのか判断する術はない。
- 13 TAAはこの人物がイスマーイール二世時代(一五七六―七八)にコルチバシとなったとすることが実際の行動は一切不明である。
- 14 この人物もイスマーイール二世治下でコルチバシであったらしい。しかし、彼の名はこの一度だけしか史料に現われず、二年足らずのイスマーイール二世時代、以後はコルチバシとして15のクリー・ベグの名が現われる。従って14のアッター・クリー・ベグと15のクリー・ベグが同一人物であった可能性も否定できない。
- 15 この人物はシャール・イスマーイール二世時代にコルチバシとなり、この王の変死に立会う。四代シャール・ムハンマドの皇后マフデ・エウリヤーの摂政時代、彼は一時的にコルチバシの職を免じられ、イस्कンダル・スルタン Iskandar Sultan なる人物がその職を占める (RM fol. 16a)。おそらくこのことも一つの原因となり、クリー・ベグはその直後に起こる皇后暗殺の陰謀に加

わることとなる。一五八五年、皇太子ハムザ・ミールザー Hanza Mirza に率いられたサファヴィー軍がオスマン軍の立籠るタ
 ブリーズ城を包囲した折、クリー・ベグはその子と共に突然オスマン側に投降する。TAA の著者イスカンダル・ムンシーは、
 ハムザ・ミールザーの母、皇后マフデ・エヴリヤーを絞殺したことに對するハムザの怒りをおそれての結果であったと言う(TAA
 p. 320)。

以上のコルチバシ達の動向をまとめてみるといくつかの興味深い事実が気付く。

まず、各コルチバシの就位年、退位年が明確でないことである。上表における年代は各コルチバシの名がはじめて史料
 に引用される年代であつて、就位時のそれではない。そもそもコルチバシの職にあつた者が史料に現われる機会は極めて
 限られているのである。そして時には誰がコルチバシであつたのか分からない時期もある。(例えば一五一四年のチャル
 ディランの戦い以後や一五六二年のセヴンドーク・ベグの死後。)これは、ワキール、大アミール、サドル *sadr* など当
 時の重要官職にあつた人物が史料に再三登場し、その交代も確実に記録されていることは対照的である。コルチバシ職
 が当時の最重要官職ではなく、政治的役割も相対的に低かつたことを如実に示す一例と解せられる。

また、上表中幾人かのコルチバシについては、史料によつて綴字に異同があり、確實な名前が不明である。6、7の人
 物の例はその最たるものであろう。他の有力なキジルバシアミール名についてはこのような不明瞭さは全くなく、これま
 たこの時期のコルチバシが政治的、社会的にかなり限定された力しか持っていなかつたことによるものと思われる。

更に、九四〇(一五三三—三四)年、シャー・タフマスプが、キジルバシ部族同士の内乱の末最後に残つた実力者で大ア
 ミールのフサイン・ハン・シャームルーを処刑して実権を掌握するまでの期間のコルチバシと大アミールの各々の出身部
 族に関して鮮やかな連関性が認められる。Çayan Sultan, Bayazid Sultan, Kapak Sultan とウスタージャー部出身
 の三人が相次いで大アミールとなつた時期(一五一四—二六)、コルチバシは3、4のウスタージャー部出身者、チュ
 ハ・スルタン・タッカーの覇権時代(一五二七—三二)は5・6のタッカー部コルチバシ、フサイン・ハン・シャーム

ルーが大アミールのポストを占めていた期間は（一五三一—三四）8のハリーファ・ムハンマド・シャームルーがコルチバシであった。大アミールの直接の影響下でコルチバシ人事が行なわれていたことは明瞭であり、この時期のコルチバシは、国政の第一人者、大アミールの傀儡であったと言っても過言ではなからう。コルチバシ自身の政治的影響力が極めて制限されていたであろうことは想像に難くない。大アミール、チューハ・スルタンと衝突したコルチバシ、タタール・オグルが容赦なく処刑されていることはこの事実をはっきりと示している。

さらに、この期間のコルチバシの行動として史料から抽出出来るのは断片的な軍事行動に限られるということも、シャー・アッバースの改革以前、十六世紀のコルチバシの性格を考える際に見逃がすことの出来ない点であろう。彼らの活躍の場は主として軍事的舞台に限られていたと思われるのである。

このように、アッバース一世即位以前のコルチバシの政治的重要性は、史料上で検討する限り決して高くはない。他のキジルバシ有力アミール（大アミールや各部族の長）が政治、軍事両面で活躍していたのに対して、コルチバシ、そしてその部下であるコルチ達の活動の舞台は、近衛兵としての日常的職務を別にすれば、軍事面に限られていたと言える。さて、コルチが近衛兵としてシャーの側近くで仕え、シャー自身からその報酬を得ていたとすると、シャーとコルチの間にある種の相互信頼関係が成立したであろうことは想像に難くない。

我々の軍とアミール達はバイボルド Baybura とエルジンジャンにおり、コルチ以外に誰も私の側にいなかった。(TI, p. 627)

これはオスマン朝のスレイマン大帝との相次ぐ戦いで窮地に陥っていた当時のシャー・タフマスプの言葉である。コルチ軍は常にシャーが最後に頼る兵力であった。サファヴィー朝の王は部族長ではなかったため、彼と血縁関係を持った人々から構成される信頼に足る十分な兵力を持たなかった。この点は、サファヴィー朝部族連合と、その後幾つかの王朝でやはり軍事力の根幹となったそれ以外の部族連合との間の大きな差異である。サファヴィー朝に先立つ黒羊朝、白羊朝、そして後のカージャール朝などの部族連合の頂点に立つ君主たちは皆、同時に部族長でもあった。近衛兵が別に存在した

とはいえ、彼らは自己の部族という必要最小限の兵力を持っていたため、これらの王朝の君主がその近衛兵に依存する度合はサファヴィー朝のそれに比べてかなり小さかったと言えよう。ここにサファヴィー朝国家におけるコルチ軍団の特殊性の一つを認めることができる。

かかるサファヴィー朝のシャーとコルチ間の信頼関係の存在を明確に示す一事例がイスカンダル・ムンシーによって紹介されている。一五八八年、シャー・アッバースが、その師傳であり摂政でもあったムルシード・クリー・ハン・ウスターシャー *Murshid-quli Han Ustāghān* を暗殺し、実権を握った直後、当時首都カズビンの知事であったムハンマド・シヤリーフ・ハン・チャヴシュル *Muhammad Sarif Han Čāvšlu* がギーラーンの一土豪ハン・アフマド *Han Ahmad* のもとへ逐電するという事件が起こった。

この人物はシャー・タフマスプの弓矢の *コルチ* (*gūnci-yi tir u khamān*) であったハリード・ハッザリド *Halid Beg b. Husayn Beg* の息子であり、マスム・ベグ・サファヴィー *Masūm Beg Safavi* の娘の子であった。陛下の恩寵をうけ父祖伝来の職 (*mansab-i mawriti*) に任じられていた。偉大なる旌旗がホラーサーンへ向けて出発する折、ムルシード・クリー・ハンが彼にハンの位とカズビンの知事職を授け、彼の職を甥のムハンマド・スルタン・クートヴァール *Muhammad Sulṭān Kutvāl* に与えた。彼はムルシード・クリーを喜ばせるために、野心を持ち出世を望んで、陛下に仕えることをやめ、父祖伝来の職を捨てて知事職とハン位を選んだ。そしてシャーの軍が帰還するまでカズビンの知事を務めた。この年(九九八・一五八九―九〇)の初めに、恩寵を失ったという印は何もなかったのに、憶病なる裏切りの結果御意に反して御前を去っていたので、恐怖から数人の従者、取り巻きと共にカズビンから逃亡した。(TAA p. 418)

主人公ムハンマド・シヤリーフはシャーとの間の個人的信頼関係を捨てて実力者ムルシード・クリー・ハンの命に従い出世を望んだためにこの実力者の暗殺後すべてを失うことになった、というのが事件の大略であるが、シャーとコルチの間には存在した親密な相互信頼関係のよく分かる例である。ともすれば看過されがちなこの関係は、実はコルチの性格を規定する重要な一要素であり、のちにシャー・アッバースはこの信頼関係を利用して軍制の改革を推し進めてゆくことにな

ろう。

ところで、我々は上述の事件からこれ以外にもコルチという職に関して幾つかの興味深い事実を知ることが出来る。

一つはこの職が世襲される傾向にあったということである。父祖伝来の職 (*mansab-i mawriti*) という語がこれを証明している。コルチであった人物の個人名が史料に登場することは極めて稀で(——このこと自体、コルチの社会的地位の相対的低さを暗示している——)、その家族関係を跡づけることは、年代記史料だけを用いている限り、殆んど不可能である。しかし、かかる語が史料に現われる以上、ある程度の確率でこの職が親から子へ伝えられていたと考えてよからう。

次に、裏切者のムハンマド・シャリーフが「ハン」の称号に魅力を感じた点も見逃せない。十六頁のコルチバシのリストをもう一度見直してみると彼の気持ちがよく理解できよう。シャー・アッバース時代以前のコルチバシで「ハン」の称号を持つ者は一人もいないのである。ただ一人を除いて全員が、「ハン」「スルタン」に次いでサファヴィー朝軍事貴族の第三階級称号にすぎない「ハグ」号しか所有していない。^① 軍団長であるコルチバシにしてこれであるから、一般のコルチはこの「ハグ」号さえ持っていないのが普通であった。例えば、シャー・タフマस्पのコルチであった AT の著者 Hasan-i Rumlu は、単に Hasan-i Rumlu であって如何なる称号も持っていない事実を我々は知っている。^②

このように、シャーの側近としての実質的名誉は別として、公の称号による社会的地位という点では、コルチのそれは他のキジルバシ・アミールや有力者より数段低いものであったことは間違いない。

① 但し、今回部分的にしか使用できなかった *Nagmat al-āzār* に於て
一々所、15 の Quli Beg が Quli Han と記されてゐる (Muhammad
b. Hidayat Allah Nanzai, *Nagmat al-āzār fī dīhar al-alyār* ed.
I. Israqi, Teheran 1350, p. 85)。こゝに同史料の別の箇所では Quli
Beg (p. 95) として Quli Han Beg (p. 361) と書かれており、或
は Quli Han と本名であったのかを知らぬ。いずれにせよ、
この *Nagmat al-āzār* の例は本名を重要視する必要はない。
② AT pp. 401, 446, ALT, fol. 144a.

おわりに

冒頭で設定した二つの課題の解明のため、本稿ではまずサファヴィー朝前半期十六世紀の史料に現われる「コルチ」が、チンギス・カン時代と同じく近衛兵を意味したことを述べ、その後、コルチ集団がどのような特徴を持ち、この時代のサファヴィー朝国家体制の中で如何なる位置を占めていたのかという問題を具体的に検討した。その結果、この集団がサファヴィー朝軍事力の根幹たるトルコマン部族を中心とした各遊牧集団から選ばれ、近衛兵としての職務に携っていたこと、兵員数はこの時代を通じて五千人を越えなかったこと、報酬は俸給とティユルの二本立てで、シャーの財庫から支払われていたこと、さらに、シャーとの間に個人的相互信頼関係は存在したが、その社会的、公的地位は決して高いとは言えず、その政治的役割もかなり限定されたものであったことなどが明らかとなった。このようなコルチ軍の基本的性格の幾つかは、モンゴル時代から変わらず受け継がれてきたものと考えられ、我々はここに前期サファヴィー朝国家の遊牧民的性格の一端を確認することが出来る。

一五八八年、シャー・アッバースの実権掌握とともにコルチ軍団に一大転機が訪れる。シャー・アッバースの改革の開始である。ここで問題とし、考察を加えたサファヴィー朝前期コルチ軍団はその姿を大きく変えて政治史の表舞台に華々しく登場してくる事となる。アッバースの改革に伴う、かかる変化、並びにそれが有する意義などの諸問題については、稿を改めて論ずることとする。

(日本学術振興会奨励研究員)

The Qurčī : A Study on the Iranian Imperial Guards
in the 16th Century

by

Tadashi Haneda

Among the terms of Turko-Mongolian origin used during the Şafavī dynasty, there appears the word “qurčī”. Although this term appears frequently in documents of that period, scholars are not yet in agreement as to its meaning.

The aim of this work is firstly to conform that “qurčī”, before the reformation performed by Şāh ‘Abbās at the end of the 16th century, meant the Imperial Guards; and secondly, to examine as exhaustively as possible the character of the “qurčī” army of those days, thereby providing some idea of what the “qurčī” army was like as a whole.

This investigation will show that the “qurčī” represented a clear manifestation of the nomadic tradition, which was still alive even as late as the Şafavī dynasty; it will at the same time provide evidence regarding what type of change occurred to the “qurčī” in the Şāh ‘Abbās’s reformation.

Kanto-moshitugi 關東申次 and *In-denso* 院伝奏 :

Their Establishment and Development

by

Kei Mikawa

I will consider the establishment of two political institutions, *Kanto-moshitugi* 關東申次 and *In-denso* 院伝奏, from early Kamakura 鎌倉 period when they appeared; the former was an important one in Imperial Court after middle Kamakura period, the latter played a great role between the Imperial Court and the Shogunate Government. There are fewer studies of political institutions of the Imperial Court in